

『移動する理論』としての地政学 —戦間期日本における展開と地政的想像—

ウォーリック大学
政治国際関係学部
渡辺 敦子

はじめに

地政学は 19 世紀後半から 20 世紀前半に欧州で発達した地理学の一分野である。小稿は、移動する理論 (Said, 1983)としての地政学の日本における受容について考察する。主に地理的決定論と国家を有機体に見立てた社会進化論に依拠する地政学は根本的に白人中心主義であり、欧米中心の国際社会の拡大を正当化した政策論として近年、英語圏で批判的研究が進み、批判地政学は政治地理学の一分野を形成するに至っている (例えば Ó Tuathail, 1996)。一方「地政学」という用語そのものは学問的發展とは無関係に度々世界的流行を繰り返しており、これに注目した批判地政学は、地理的知識を振りかざす言説を権力との関係のうちに捉え、ある種の地政的想像を促すものとして、現代の国際政治における役割を解明してきた。日本はその黎明期に古典地政学を積極的に取り入れた唯一の非白人国家であり、戦後は西側の一員として冷戦における象徴的な役割を担ってきた。だが地政学は軍国主義に加担した理論として長年タブー視され、研究はあまり進んでいない。本稿では、批判地政学の権力への問題意識を継承した上で、むしろ地政学と政治との実際のかかわりよりこの時代の日本人が、特に東京という近代国家日本の樹立発展のため夥しい数の理論を欧米から輸入摂取し続けた場所において、なぜ、どのような問題意識のもとに古典地政学を受容し、その結果いかなる空間、そして国際的な権力を想像したかについて論考を試みる。

本稿では、ある「知る共同体」に育まれた共通意識により規定される「問いの立て方」に焦点を当て、理論が通過する場所を分析する枠組みを提示する。知識は、その土地に「位地」する、つまりそれぞれの共同体の独自の経験と結びつくことによりはじめて知識となるものと考えられる (Thrift, 1999; Jenco, 2007)。その摂取は偶発的で、知識の受容というより受け手による「知る」行為として捉えられ、常に複式、無定形で生産的、行為遂行的 (performative) である。非西欧国家としての日本の古典地政学の吸収は、根本的に批判的摂取であり、独自の理論への発展を目指すものであった。つまり古典地政学は欧州中心の近代的知政的想像の拡大 (Agnew, 2003) を促進したのでは必ずしもなく、むしろ異なる世界観を発達させた「道具」であり、西欧を超える「世界新秩序」の樹立という日本人独自の想像をより鮮明に浮かび上がらせる役割を果たした。知識と地理の交差点に注目したこの分析はオング (2007)の言う「集合分析 (analytics of assemblage)」であり、テキストという形での異文化間の知識の移動によって生じ得る権力主体に対する認識の変化の一端を明らかにすることを目指す。

場所から想像される空間：知識の通過点としての東京、そして地政的想像

『翻訳図書目録』は、1868年から1944年までに日本で翻訳された、または翻訳を含む図書として1万4613タイトルを収録する。出版社の集中度を考慮すれば大半は東京で出版されたもので、近代の東京はまさに欧米のあらゆる理論の一大集積地であった。本稿の分析対象である地政学については、地政学という用語を考案したスウェーデンの政治学者チェーレンの著作6冊をはじめ、政治地理学の祖ラッツェル、知日家ハウスホファーら、今日主要とされる文献はほぼ網羅されている。ちなみにチェーレンの本は英語圏では一切翻訳されていないといい（Tunander, 2001）、日本でのこの種の理論への関心の高さが伺われる。

知識の通過点としての場所を分析するために、私は、丸山真男の「執拗低音」と西田幾多郎の「場所の論理」を土台とした独自の空間についての概念を用いる。ジェンコ（2007）は、異文化間分析のアイロニーは、ポスト構造主義など欧米中心主義の批判が結局、当の欧米の言説に依拠する点にあるとし、それぞれの共同体が歴史的に育んできた「問題の立て方」に着目し、西欧かローカルかの二元論を超えた当該社会の「内側から」のアプローチを提案する。丸山と西田は通常、異なる思想的伝統に属すると考えられがちである。だが私の興味は、両者が急速な近代化と西欧化により生じた日本社会の歪みと不透明感を見つめつつ、知識受容についての思索において空間の役割を重視したことにある。両者は、異なる出発点から発しながら「知る」という行為を本質的に内在的な無意識下に始まるものと理解し、他者ではなく自己と場所との偶発的な日常のつながりにおいて捉えるという共通の結論にたどり着いたように私には思えるのである。翻って日本では、戦後地理学の脱政治化にも見られるように、空間という概念は世界的な潮流以上に避けられがちなものであった。一方で2つの卓越した知性の空間への着目は、近代国家日本におけるその役割の大きさを明らかにすると同時に、一見精神的にかけ離れた場所にいる両者が、マンハイム（1936）が言う同じ「知る共同体」に属していたことを示している。ならばそれらの思索が示す近代日本の空間に関する「問題の立て方」に従い、理論の通過点としての東京を考えてみようというのが私の企てである。ただし本稿では実証分析を中心に論じ、分析枠組みについてはその空間概念の概略のみを説明する。

アグニュー（2009）は、いかなる知識も特定の場所にいる誰かの歴史的経験を反映する、と指摘する。近代社会においては「誰か」とは常に西欧であったが、その普遍的主張は、グローバル化により疑問視されるに至った。だがそのひとりよがりな主張を叱責するより、なぜそうなったのかを考えることこそが、国際社会の相違を認め、無用な「押しつけ」を避けることにつながる。その主張には同感するが、西洋（厳密に誰を意味するにせよ）からの知識を進んで取り入れて西洋に追随し、抗い、

そして再度追従した近代日本の経験が示唆するものは、その先にある。知識とそして権力は、押し付けられるだけではない。その場所に根付くにはその社会の根との結合を要求し、それは偶然の一致にすぎない。だが一度結合すれば人々の生活に根付いて独自に発展し、そのコミュニティの人々の想像力を養う。この意味では、西欧のみならず誰もが「ひとりよがり」であろう。想像力は、言うまでもなくその主体のものである。一方バーンズ (1988)は、社会的な力を「行動のための潜在性」と定義する。この意味での力とはある社会に埋め込まれた「常識」に近く、共有性は作用の原則である。バーンズにとって社会とは、「社会的慣行により実質的に確認される自己言及的知識の分配」に基づくものである。常識と同様に力は、繰り返し実践される場所を必要とする。ならば知識と権力の関係は、特定の空間と時、そこにいる人々の実践において理解されねばならない。さらに知識のグローバルな空間を超えた伝達は、さまざまな場所で展開する複数の想像力に影響される。グローバルな権力は、それらの産物である。その複雑な仕組みは構造分析よりも、それぞれの結節点を観察する集合分析 (Ong, 2007) を集積し、さらにそれらを相互に関連づけることにより、より明らかにされるはずである。

本稿では、知識の通過する空間を考えるフレームワークとして、西田幾多郎の「場所」を4つのはたらきに分けた中村 (1980) の議論を発展的に援用し、空間を3つの角度から考える。注意したいのは、ここでの問いはある共同体がある知識を何を課題とし (なぜ)、いかなる状況の中で吸収したのか (どのように) であり、その知識 (本稿では地政学) の是非や、解釈の正誤を論じるものではない。ゴールはあくまで知識の移動による「力」の変化を考察することであり、それは竹内 (1959) に従えば、イデオロギーから腑分けした「事実としての思想」(p. 283)を捉える試みである。また私のケースは西欧から日本への知識の移動であり、物理的・精神的距離を前提とする。サイードの言うように移動するのはテキストであり、通常、発信者の意思は伴わない。もちろんテキストに含まれた意思は読み取られるであろうが、いかに読み取るかは受け手次第である。また翻訳の問題については、分析した多くのテキストが原書を参考文献としているためここでは敢えて考慮に入れない。

この問いのために検討される空間は①受け手社会の存在する物的空間、②受け手の隠された立脚点としての場所、③想像される空間—の3つである。①はある程度理性的に解釈される知識の受け手の社会的、地理的な位置を含み、これらは摂取の仕方がある程度まで物理的に規定し、当然、交通の発達などにより変化する。ここでの核は、その社会に共通して繰り返される「問いの立て方」である。この場所に入ってきた外来の知識は、その場所にある歴史的に形成された「思考の枠組み」(丸山, 1972)により、時に思わぬ方向に発展する。ただしそれは主旋律になることはなく、いわば氷山の一角にすぎない表象＝主旋律を支える海面下の日々の直覚 (Thrift 1999)であり、表象に注意を奪われれば、そ

の密やかな変換は見落とされてしまうだろう。同時に、個々の判断は場所を通じて他者に影響を与える。一連のプロセスの結果、③ある空間が想像される。ここでの焦点は、力がどう想像されるかである。想像された空間はその共同体の共通体験に基づくが、同時に新たな行動を誘発し、受け手の立脚点を変質させる。同時に、社会的、地理的な空間も変化してゆく。ある程度まで、ここで言う場所はむしろ主観的なものとして、一方空間は客観的なものとして考えられるかもしれない。従って概して言えば場所は大小複数的に重なり合い、空間は単数的である。ただし想像力そのものはそれぞれの場所からなされ、複数でなければならない。重なり合う場所は経験や判断の共有によってある程度まで表面上統一される、又は分裂する可能性をもち、想像される空間も従って変化を遂げる。これらの3つの場所と空間が出会う交差点で、知識は新たに組み替えられるのである。

ではこの「知る共同体」のメンバーは誰か。「日本」とは、当該社会において誰を指すと考えられているだろうか。西田（1987）の述語としての場所の規定性の論理に沿えば、そのカテゴリーは場所にある。つまりたまたまその国土にいる人々、ということになり、人種や民族の問題ではない。さらに「国土」という概念も場所にある対象のひとつであり、時と共に変化する。また丸山の執拗低音でも、それが日常性の共有に基礎を置いている限り、「日本人」とはあくまで、日本と呼ばれる場で日常を共にしてきた人々のことであろう。実際、小熊英二（1995）によれば、戦前には日本人とは複数の血が混じった混血民族であるとする考えが優勢で、「単一民族説」は戦後支持された神話であった。次の項で触れるように、混血民族説は地政学の受容においてもたびたび見られる議論である。ただしここでの問題は、単一民族論と混合民族論のどちらが学説として正しいかではない。そもそも場所と日常に力点を置いた場合の「混合性」は、必ずしも「多様性」の同義語とはならず、前者を日本人の排他性の、後者を日本人のコスモポリタンの性向の証左とするのは単純すぎる議論であろう。むしろ私の興味は、この民族に関する想像のありかたが、彼らの「力の場」の認識、つまり国際関係という空間を、自分たちの場所からどう理解していたかを示唆するだろうということである。

移動する理論としての地政学

まずテキストの概略だが、1925年に藤沢がチェーレンの地政学を紹介した論文から始まり、1944年までの欧州の理論について言及した約50本を取り上げた。学術論文、新聞や総合誌に掲載されたもので、執筆者は地理学者、政治学者、法学者、経済学者、哲学者らである。先行研究では批判派、肯定派などのカテゴリーに分けて論じられることが多いが、集団としての受容を問題とする本稿では、むしろ全体に共通して見られる要素に焦点を当てる。同時により大きな思想の流れに位置づけるため、直接地政学に言及しなくても地理と国家、風土、文化などについて論じた著名な文学作品、さらに植

民地政策や戦争に関する政策文書などもできる限り幅広く検討した。すべての分析は現時点では終了しておらず、ここでは一部のみ紹介する。重ねて言うが、この論考はその受容の善し悪しを判断するものではなく、受容により想像される権力の変化を見るためである。

地政学とは、Geopolitik の訳語である。紙幅の関係から、欧州での発展は概略のみを述べる。用語そのものはチェーレンにより 1899 年ごろ考案された。だがその創始者は、ドイツ人地理学者のラッツェルとされる。動物学からキャリアをスタートさせた彼は「国家は人類の一団と大地の一片である」として国家の生存権を主張、国家を自然の一部と解釈する国家有機体説と地理的決定論を提唱することにより、当時、地誌学的性格を強めていた地理学に生物学的方法論を導入し、「科学性」を付与した(飯塚、1942)。一方で、現実には新聞などで当たり前のように語られる擬人化された国家像と、当時の国家の法的側面のみを強調した政治学の乖離に不満を感じたチェーレンは(藤沢、1925; Tunander, 2001)、国家の社会性を強調する形でラッツェルの国家有機体説を発展的に吸収した。さらにこの理論は第一次大戦を経てドイツのハウスホファーらに継承され、歴史的要素と「実用の学」としての主張、その結果の預言性を強め、連合国側から「ナチの科学」と形容されるに至った。ある意味において地政学とは、大航海時代により地球上をくまなく探検したことにより一種の万能感を手にした西欧社会が、ダーウィンの進化論から受けた衝撃のもとに見いだした社会的産物であった。

冒頭でふれた批判地政学では、このドイツ学派にマッキンダー、マハンら英米の学者を含めた白人男性的理論が、異なる文化的背景を持ちながらも欧州中心の国際情勢の「論理づけの方法」を体系化した「地政的伝統」(Ó Tuathail, 1996)を構成、戦後は国際関係論における「国家利益」を強調したりアリゾムの思考にも反映され、冷戦を通して国際政治の言説の主流をなした—とする。その特徴は帝国主義、白人優位主義であり、オトゥーホールが最も強調するのは、この伝統に培われ、国際政治の支配的言説となる「デカルト的大局観主義」である。空間から切り離された主体は世界すべてを自己の視界に苦もなく収め、国際政治は彼らの劇場となった。また地政学という言葉の意味においては、オトゥーホールはデリダ的戯れによる曖昧性を指摘する一方、地球を「脱地理化」した地政学は、西欧中心の方法論により地球とその政治を計測し、世界地図をほしいままに描く「ジオパワー」として西欧の「場所」と力の主張を他グループに認めさせてきたと主張する。地政学の特徴は、それが実際の政策として国家に採用されることよりもむしろ、実際には透視不可能な世界情勢のもっともらしい解説として民衆レベルで受け入れられ、人々の間に地政的想像を涵養することにある。だからこそ地政学という言葉は、今世紀においても、世界情勢が流動化するたび政治的言説により蒸し返されてきた。

またこの想像は、国際間ではイデオロギーとして機能する。アグニュー（2003）によれば、これらの古典的地政学に見られる国家の自然的性格の強調は、普遍的な科学的知識として「近代的地政的想像」を培い、物質な力を伴う欧米帝国主義諸国により、その他の地域に押し付けられてきた。米国や日本など欧州発のこの思想を理解した国々はそれに従い、一方で列強間の首位を追求することで「列強のヒエラルキー」を形成してきた。つまり第2次世界大戦はその同じ志を分け合う国々の「生存権拡大」の必要性を信じた闘争だったということになる。

上記の理解は、英国学派など国際関係を西欧社会の拡大の過程として捉える他の構成主義的国际関係論の理論と軌を一にし、さらに想像力と言説の役割をその過程の中心に据えることで現代の世界情勢の一面を効果的に説明している。しかし一方で戦前の日本と地政学の受容を考えたとき、その想像は本当に共有されたのか、という疑問が湧く。国際関係の構造的な理解が共有されていたのなら、なぜ戦争は起きたのか。しかもその戦いは、日本では文字通り終わりのない「永久戦」と認識されていた。オトゥーホルの議論では、地政学のもつ意味的曖昧性を問題にしつつも、力の主体はあくまで、理論の著者である西欧と主張される。この文脈では、日本はそのメタ地理的想像のなかでまさに「脱亜入欧」し、西欧的主体として列強の第一位を争うために戦争をしたのである。だがそもそも欧米の優位性を地理的、人種的に正当化した地政学にとり、極東の非白人国家であり、日露戦争で「西欧」に勝ったと自覚する日本は、困難な到着地だったはずだ。外面的には、日本は確かに欧州型帝国主義国家であり、現在の歴史の教科書でさえしばしば用いられる「人口増大」「資源逼迫」などの参戦理由は、国家の「生存権拡大」の現代版”科学的”解釈と言えなくもない。だが今もなお繰り返される「日本人はなぜ戦争をしたのか」という国民的疑問は、この解釈の正当性を揺るがすものではないか。

戦前の思想状況に目を転じれば、当時、最も思想界をにぎわせたスローガンは「近代の超克」であった。通常、太平洋戦争勃発後の1942年に行われた雑誌『文学界』の座談会と、前年から2回にわたって行われた京都学派の哲学者による座談会がそのシンボルとして取り上げられるが、影響力の大きさに比して無内容性が指摘され、また特に前者では、参加者の思想的バックグラウンドは全く単一ではなかった（竹内、1959）。また「近代」と「西欧」は大抵二重写しにされ、超克すべきは資本主義、民主主義、共産主義、近代科学、つまり近代的と認識されるものすべてであった（廣松、1989）。19世紀末から活発化した文明論の文脈では、日本人は東西両文明を乗り越える民族と自覚され、露戦争後強まった明治以来の近代化・欧化への達成感、さらにはそれと裏腹の閉塞感と相俟って、ようやく見いだされた「出口」であった。1936年の外交政策文書は、「人口増大」による国家拡大の必要性を軽々と否定してみせたうえで、戦争は人道的な見地に立ったものでなくてはならない、と主

張する。「一旦日本と他国との間に一大国際戦争が勃発すれば、日本は恐らく数十万乃至百万の人命を犠牲にし、また百億の国幣を煙にせねばならない」。膨大な犠牲を前提とする戦争の目的は、国民生活の向上であろうはずがなく、「日本を中心とする東亜民族の結合と其恒久的福祉安寧の為」でなければならない。和辻 (1937) の言葉では、日本人の「運命」は「10 億の東洋人」の自由を守ることである。

竹内好は、論考「近代の超克」で、太平洋戦争は軍国主義者によるものでないと主張する。「...国民が民族共同体の運命のために「総力を挙げ」たのである。今日、シンボルとしての天皇と、権力主体としての国家と、民族共同体としての国民を我々は区別することができるが、それは敗戦の結果そうなったのであって、総力戦の段階へ類推を及ぼすことはできない」。その「運命」は 1938 年の近衛内閣による声明にある「東亜新秩序」という言葉に端的に表現されたものであり、欧米帝国主義に反対するアジア的「道義主義」として、竹内のような反帝国主義者までが支持した何ものかであった。だがそれは戦後、「軍国主義者対無辜の国民」という国内の対立構図に置き換えられ、日本人は「単一民族」となり、興味深いことに現代のアグニューの主張に近いものとなった。ならば日本人が欧米の地政的想像に「従った」というのは、竹内の言う通り戦後以降の話であろう。ちなみに上記声明につけられたタイトルは「国民政府と謂ども拒否せざる旨の政府声明」とあり、日本の想像が果たして中国の人々とさえ共有されていたのかという疑問を抱かせる。

先に述べた藤沢の論文は、地政学を国家学の「新機軸」として好意的に書いた。だが渡辺 (1942) によれば批判的な反応が大半で、特にその「科学性」に疑問の目が向けられた。だが 1935 年ごろから同じ内容のものが一般刊行物に紹介されることで、「難解」と「高級」を「混同」するインテリ層を中心に大きな反響を呼んだ。渡辺はこれを、何かにつけて「ドイツでは」という風潮に加え「社会的地盤」ができたためと分析している。また渡辺は、地政学を「飽くまでも国によって異なるべきであり、又あへてその必要を認めない国々には必要ないもの」と指摘している。ハウスホファーは 1908 年から 2 年ほど日本に滞在、日本関連の著作を多く書いているが、1925 年の『太平洋地政学』は 1942 年に、1921 年の『大日本』は 1943 年によく翻訳された。「日本地政学協会」が機関誌『地政学』の発刊を始めたのは 1941 年である。また当時、地政学に鋭い批判を加えたウィットフォーゲルの著作はハウスホファー以上に多数翻訳されている。川西正鑑ら、批判者から提唱者に転じた者もいる。このように日本の地政学の受容は批判で始まり、戦局が緊張の度を高めるに従い一転、受け入れられていった。

この結果、日本における地政学は、オトゥーホルの主張とは内実として異なるものに発展する。地理的決定論は、地理が人間を物理的に規定するものとしてではなく、地理は人の住む「生活空間」

であり、地理と歴史が人を作り、人により作られるものとして解釈される。民族は単なる生物学的分類ではなく、文化が異なる人々を束ね、可能性を秘めた地理がその媒介となる。従って有機体としての国家という発想は、国家そのものがひとつの生物というよりむしろ、万世一系の天皇の下に果てしなく拡大する有機的共同体として想像される。具体的には国家から地域主義としてアジア全体へ、理論的には西欧を含む世界全体へと広がる。各民族にはそれぞれの場所と果たすべき役割があり、複数性は尊重されねばならない。こうして科学性は倫理性、道徳性に置き換えられる。それはある意味においてはたしかに、コスモポリタンの見え、今日の構成主義に見られる民族論にも類似する。ここで見られる主体は、東洋を主張し、西洋に抗っているように見える。

地政学の捉える空間について最も洗練された議論のひとつは、江澤（1944）のものであろう。江澤は地政学における客観化は自然科学的ではなく、人間の体験の類型化であり、客観化により「生活空間」に意味を付与すると定義する。だが空間としての「国土」は固有であり、民族は不動の「場所」を持ち、その意味において常に「特殊」であり、「意思の主体」である。現在の類型学は歪曲されており、それぞれの民族の自覚により正されなければならない。江澤によればチャーレンも解釈学的側面を強調しており、地政学とは意思の主体による「生活空間」の全体的把握である。京都学派のひとりである前述の座談会に出席した高山岩男（1940）のよく知られた論文『歴史の地理性と地理の歴史性』もこれに類似し、ラッツェルの地理的決定論とフェーブルの景観論を、天と人の恵まれた一致点に生じる民族の主体的行動を強調した概念「天人合一」により論破する。同様に近衛文麿に近かった政治学者の蠟山政道（1941）も、地政学は従来の社会科学とは違う「主観」の学問であると論じ、それは新聞に多くのコラムを掲載した小牧（1942）によれば「当為の科学」で「存在の科学」ではない。同様の論は岩田孝三（1942）にも見られる。彼にとって国家は、その土地に優秀な民族が住むことにより独自の性格を歴史的に発展させる。日本人は海洋由来の「天孫民族」と大陸の「出雲族系」の融和した民族で、大陸的性格と海洋的性格を併せ持つため、近年、飛躍的な発展を遂げた。よって陸と海の双方で構成される大東亜共栄圏を指導するのは、その特性に沿った日本人の宿命である。このように地政学は主観的な「予断」の学であり（蠟山、前掲書；江澤、前掲書）、「勇気」（蠟山、前掲書）、「希望」（渡邊、前掲書）の学なのである。

この「主観的客観性」とも呼ぶべきものにより、人種も土地との関連において「意思」をもって解釈される。江澤（前掲書）は従来の人種学は「生活空間とは無関係」として退け、民族の移動の方向に焦点をあてた当時の新理論を援用し、ある地域が「統一的な空間」を形作り文化や習慣を共有することで新たな民族のカテゴリーができると主張する。米倉（1941）も「種的社会は相違なる自然的類型によって生産されたもの」で、常に変化すると断ずる。つまり膨張するのは生物としての国家ではな

く、その器官としての民族であり、その膨張は他者の併呑ではなく土地を媒介とした間断なき包含である。ただし各民族は消化されるのではなく、それぞれの分をわきまえての自治が許される（阿部 1933）。かくして行為する主体としての国家は、成長し続ける生命体ではなく、無制限に拡大する「倫理体」「道德体」（小牧、前掲書）として擬人化される。

こうして拡大する国家は、いずれ「地域」へと発展的に解消するはずである。高山（前掲書）によれば、過去の特殊的世界史は欧州の大航海時代をもって普遍的世界史となったが、また再び複数の世界史に戻るときを迎えている。西欧的科学主義が危機を迎える今、「我々の負ふ任務は、近世のヨーロッパ的世界を否定して、世界諸民族がその固有なる価値を發揮すべき新しき中世創造の主役であることである」（米倉、前掲書）。三輪（1981）によれば 1930 年代以降の日本の外交政策は、明治以来の政府の現実主義と、民間の理想主義が逆転した時代であった。これによりアジア回帰が進み、その象徴が「近代日本が世界に向けて公示した空前絶後のグランド・ポリシー」である大東亜共栄圏構想であった。近衛のブレントラスト「昭和研究会」の小冊子『新日本の思想原理』によれば、東亜共同体の成立は「今日の世界の動向に合致」し、「世界史の段階における新しい原理」である。それはグマインシャフト的な東洋ヒューマニズムであり、日本人は主導的立場にあるとはいえ、ほかの民族同様に民族主義を制限し、その原理に従う。日本人に求められるのは「自覚」である。徳富蘇峰によれば、その自覚は「東亜の日本」から文明の壁を乗り越え、いずれ「宇内の日本」になるべきであった。

おわりに

和辻哲郎は昭和 25（1950）年に刊行した『鎖国』において、日本人に欠けていたのは「航海者ヘンリ王子であった。あるいはヘンリ王子の精神であった」と述べている（1982: p. 304）。その精神は、和辻によれば「外に向かう衝動」であり、自己の視圏を拡大する「科学的精神」を意味した。本稿の視点から興味深いのは、和辻が主張するその「精神」が、近年の批判地政学が批判する、古典地政学に見られるデカルト的大局観主義と呼応することである。上記に見た戦間期日本の地政学の受容はまさに、ある種この「大局観主義」を否定的に捉え、日本的な「主観性」を強調した形で行われたと言え、和辻の「反省」は、地政学に限らず、戦間期に多くの日本人の科学に対する受け止め方に広く見られた同様の特徴に対応するものとも考えることも可能であろう。繰り返して述べてきた通り、私の分析は権力の捉え方の推移を一つの理論の移動をもとに明らかにすることであり、和辻の議論の正当性を追認するものでも、あるいは反論を唱えるものでもない。むしろここでの私の興味は、戦争を通じた日本人の「世界」に対する認識の、劇的な転換それ自体である。

大東亜共栄圏と近代の超克論、そしてそれと唱和する日本の地政学が、戦中の日本で多くの国民を呑み込むイデオロギー的な役割を果たしたことは疑問の余地がない。地政学という理論が、「西洋」という、近代国際社会で特権的な地位を保ってきた政治主体を作り出す装置であったとしても、移動したその先の、闘争期の日本という到着地で生み出した主体は、あくまで日本（あるいは東洋）的なものであった。地政学は確かに、日本人にも同様に世界を一望する望遠鏡を与えたかもしれない。だがそれで何を見るかは、主体の意思とそのよって立つ場所による。非西欧初の列強としての自負を強めていた国にとり、これ以上の西欧への同化は、後進と認識された民族との同一視と同様に受け入れがたいものであった。そのためには人種は柔軟な概念でなくてはならなかったし、国家間、文明間の境界は取り払われるべきものであり、ここで見られる他者との区別は境界概念ではなく、むしろ同心円的である。そしてその「柔軟性」への志向は、ある特有の法則性をもって理解される。国家も表面上は同じ生物体になぞらえられても、その成長のしかたの規定には、微妙な差異が見られる。しかしその微妙な違いの結果想像された空間は、批判地政学が説明するものとは異なるものであった。

日本の戦後は、「史観」という言葉に表されるように、丸山の言う「主体」を探す旅であった。上山（1964）は戦後、日本人が敗戦により直面したのはあらゆる評価の逆転であり、わずか一晩で大東亜戦争は太平洋戦争に、皇国日本はファシズムに、鬼畜米英は民主主義に、東亜新秩序は植民地主義となったと指摘する。その「多角的反省」はどの国民も体験しなかった希有の体験だが、実際には太平洋、大東亜、帝国主義戦争、抗日戦争史観のどれも無傷ではあり得なかった、と上山は言う。その意味では、これらの史観が問うているのは、どれが正解かではなく、私たちが特定の時と場所でどんな権力を背後に想像するかなのだ。さらに言えば、どれもがある程度の真実とある程度の嘘（または記憶違い）を含んでいる。少なくともこれらが示している共通の真実は、私たちが「考えることができるもの」（考えるものではない）は時と場による、ということではないだろうか。この意味において知識は、マンハイムの指摘する通り行動的であり、丸山の言う通り多産的である。それは常に特定の場所において行われる習慣的行動により確認され、発展する。場合によっては集団健忘症とおぼしき事態まで引き起こし、さらに時と場所を超え、蘇るかのように見えることもある。知識は確かに権力を生むが、どんな主張もある関連性においてのみ成り立ち、それは根本的に偶然性の一致である。その結節点は、ある時と、そして「場所」を必要とし、日本に輸入された地政学にとっては、それは目まぐるしく変化し続ける都市・東京をおいてほかになかった。

参考文献

阿部市五郎(1933)『地政治学入門』 古今書院

アルザス日欧知的交流事業日本研究セミナー「東京」報告書

飯塚浩二 (1942、1943) 「ゲオポリティクの基本的性格」 『飯塚浩二著作集 6 人文地理学説史、地理学批判』 平凡社 pp. 180-221

岩田孝三 (1942) 「地政学的に見たる日本民族の大陸・海洋両面的性格」 『地政学』 1(2)pp. 37-54

上山春平 (1964) 『大東亜戦争の意味：現代史分析の視点』 中央公論社

江澤譲爾 (1944) 『国防地政論』 千倉書房

小熊英二 (1995) 『単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜』 新曜社

小坂国継 (2002) 『西田幾多郎の思想』 講談社学術文庫

小牧実繁 (1942) 『日本地政学宣言』 白揚社

昭和研究会 (1939) 『新日本の思想原理』

高山岩男 (1940) 「歴史の地理性と地理の歴史性」 高山岩男 (1995) 『世界史の哲学』 pp. 96-165.

竹内好 (1959) 「近代の超克」 西谷啓治ほか (1979) 『近代の超克』 富山書房百科文庫

中村雄二郎 (1980) 『西田幾多郎』 岩波書店

西田幾多郎 (1972) 『善の研究 (改訂版)』 岩波文庫

西田幾多郎 (1987) 『西田幾多郎哲学論集 I: 場所・私と汝 他六篇』

西田幾多郎 (1940) 『日本文化の諸問題』 岩波新書

日外アソシエーツ編 (2007) 『翻訳図書目録 明治・大正・昭和戦前期 4』 日外アソシエーツ

廣松渉 (1989) 『〈近代の超克〉論：唱和思想史への一視覚』 講談社学術文庫

藤沢親男 (1925) 「ルドルフ、チェーレンの国家に関する学説」 『国際法外交雑誌』 24(2) pp.49-69

丸山真男 (1960) 「思想史の考え方について—類型・範囲・対象」 丸山真男 (1992) 『忠誠と反逆』 筑摩書房 pp. 355-388

丸山真男 (1972) 「歴史意識の『古層』」 丸山真男 (1992) 『忠誠と反逆』 pp.293-351

丸山真男 (1976) *Some Aspects in Moral Consciousness in Japan*. 未発表英文草稿、東京女子大学丸山真男記念比較思想研究センター所蔵

丸山真男 (1978) 「思想史の方法を模索して—一つの回想—」 『丸山真男集 10 卷』 岩波書店 pp.313-347

丸山真男 (1985) 「政事の構造—政治意識の執拗低音—」 『丸山真男集第 12 卷』 岩波書店 pp. 205-239

三輪公忠 (1981) 「『東亜新秩序』宣言と『大東亜共栄圏』構想の断層」 三輪公忠編 『再考・太平洋戦争前夜』 pp. 195-231 創世記選書

米倉二郎 (1941) 『東亜地政学序説』 生活社

蠟山政道 (1941) 「大東亜共栄圏の地政学的考察」 『東亜と世界 新秩序への論策』 pp.360-381

渡邊光 (1942) 「所謂地政学の内容と将来性」 『地理学研究』 (10) 1 pp.44-50

和辻哲郎 (1937) 「文化的想像に携はる者の立場」 『思想』 184(9)pp.117-121

和辻哲郎 (1980) 『鎖国—日本の悲劇— (上) (下)』 岩波書店

Agnew, J., 2003. *Geopolitics: Re-visioning World Politics*. 2nd edition. London: Routledge.

Agnew, J., 2009. Making Strange Familiar; Geographic Analogy in Global Geopolitics. *The Geographical Review* 99 (3), pp. 426-443.

Barnes, B., 1988. *The Nature of Power*. Cambridge: Polity Press.

Jenco, L. H., 2007. "What Does Heaven Ever Say?" A Methods-centered Approach to Cross-cultural Engagement. *American Political Science Review*. 101(4), pp. 741-755.

Mannheim, K., 1936. *Ideology and Utopia: An Introduction to the Sociology of Knowledge*. Translated from German to English by L. Wirth and E. Shils. New York: A Harvest/HBJ Book.

- Maruyama, M. 1988. 'The structure of matsurigoto: the basso ostinato in Japanese political life.' In: Henny, S and Lehmann, J eds. 1988. *Themes and Theories in Modern Japanese History: Essays in Memory of Richard Storry*.
- Ong, A., 2007. Neoliberalism as a Mobile Technology, *Transactions of the Institute of British Geographers*. 32(1), pp. 3-8.
- Ó Tuathail, G, 1996. *Critical Geopolitics: The Politics of Writing Global Space*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Said, E., 1982. Traveling Theory. In: M. Bayoumi and A. Rubin eds. 2000 *The Edward Said Reader*.
- Thrift, N, 1999. Steps to an Ecology of Place. In: D. Massey, J. Allen, P. Sarre, ed. 1999. *Human Geography Today*. Cambridge: Polity Press.
- Tunander, O., 2001. Swedish-German Geopolitics for a New Century: Rudolf Kjellen's 'The State as a Living Organism.' *Review of International Studies*.27(3)